

**P-406** 抗D抗体が異常高値であったRh陰性妊婦に対して血漿交換と胎児輸血にて生児を得た1症例

兵庫医大

田中宏幸, 堀 理照, 藤城佳世, 伊田昌功, 小森慎二, 辻 芳之, 香山浩二

Rh陰性妊婦の分娩後のRhIg製剤投与が普及し、最近では抗D抗体を持っているRh陰性妊婦は著明に減少しているが、今回7回経妊1回経産の妊婦で今までに1度もRhIg製剤を投与されておらず、今回妊娠初期に抗D抗体価がすでに512倍であった妊婦に対し、27回の血液透析と5回の胎児輸血を行い無事生児を得た症例を経験したので報告する。患者は32歳、G(7)P(1)、過換気症候群、冠れん縮性狭心症を合併。平成3年に他院にて妊娠36週時に抗D抗体高値のため緊急帝王切開にて第1子を出産しているが、その出産前に4回、出産後に2回の人工妊娠中絶を施行している。しかし、いずれの妊娠でもRhIg製剤は投与されていなかった。平成13年3月に妊娠診断希望にて当科受診。妊娠9週の時点で抗D抗体価が512倍であり、妊娠15週では1024倍であった。妊娠19週より血漿交換を開始し、妊娠20週時に臍帯穿刺にて胎児採血施行したところHb 7.8g/dlであり、臍帯血管内胎児輸血を行なった。その後週2～3回の血漿交換(合計27回)と2～3週毎の臍帯血管内胎児輸血(合計5回)を行なった。抗D抗体価の最高値は4096倍、胎児Hbの最低値は3.6g/dlであった。抗D抗体価の高値が持続し、抗C抗体や抗血小板抗体の産生も認められてきたため、妊娠29週1日で帝王切開術を施行した。児は、1106g、As 1/4で出生直後より交換輸血を行ない、以後光線療法およびγグロブリン投与にて経過良好な症例を経験したので報告する。

**P-407** 新生児咽頭粘液中の細菌検出率からみたPreterm PROMに対する予防的抗生物質投与の至適期間の検討

兵庫県立こども病院周産期センター

竹村直哉, 鈴木美奈子, 大西真砂子, 菅原 正, 乾 昌樹, 原田 明, 大橋正伸

【目的】Preterm PROMに対する予防的抗生物質投与の至適期間を検討するために新生児咽頭粘液中の細菌検出率と破水週数、妊娠延長期間、分娩週数の相関性について調べた。

【方法】1996年から2000年までのPreterm PROMのうち、破水週数が22～33週の150症例を対象とした。破水直後に経腔的に採取した羊水(母細菌)と出生直後の児咽頭粘液(児細菌)の細菌培養をおこなった。母体の全例にABPCまたはセフェム系の抗生物質を投与した。

【成績】母細菌と児細菌の検出率はそれぞれ22.6%と11.5%であった。両者ともに検出された率は7.3%であった。母細菌の有無と破水週数、延長期間、分娩週数には有意の相関は認めなかった。破水週数別の児細菌検出率は22～27週(4%)、28～31週(8%)、32～33週(18%)、破水～分娩までの期間による児細菌検出率は48時間以内(8%)、2日から7日(12%)、8日以上(13%)とともに増加傾向を示した。分娩週数別では22～27週(3%)、28～31週(10%)、32～33週(16%)と増加し、とくに分娩週数32週を境として児細菌検出率は有意に上昇した( $p=0.04$ )。

【結論】Preterm PROMに対して予防的抗生物質投与を積極的におこなったにもかかわらず、分娩週数が32週を越える時点から児咽頭粘液中の細菌検出率が有意に上昇したことから、32週以降の予防的抗生物質投与には臨床的意義が少ない可能性が示唆された。

**P-408** ヒト頸管由来上皮細胞存在下におけるLactoferrinの細菌に対する発育抑制効果の検討

昭和大学

大槻克文, 盛本太郎, 鈴木 真, 齋藤 裕, 岡井 崇

【目的】頸管における細菌感染は上行性に進展し、絨毛膜羊膜炎や切迫早産の原因となり、その予防・治療法の開発が急がれている。我々は株化ヒト頸管細胞を培養し、natural antibioticsであるrecombinant human lactoferrin(rh-LF)とlysozyme(LYS)の存在及び非存在下での*Escherichia coli*(*E. coli*; strain Ec5)の発育に対する影響を検討した。

【方法】ヒト粘液産生性頸管細胞株(HeLa(ATCC; CCL-2))及び非粘液産生性頸管細胞株(ME-180(ATCC; HTB-33)) $1.5 \times 10^6$  cells/wellをrh-LF 100 $\mu$ g/mlまたはLYS 1 $\mu$ g/ml、あるいは両者(rh-LF+LYS)と*E. coli*と共にCO<sub>2</sub> incubatorにて2時間培養を行い、その後培養上清を採取した。また細胞を回収しTriton X-100にて可溶化した。各培養上清および細胞可溶化液での*E. coli*のColony forming unitsを測定した。

【成績】HeLa細胞存在下において、rh-LF、LYS、rh-LF+LYS添加群いずれの場合も、細胞非存在下と比較し共培養後の*E. coli*数は接種前に比し有意に低値を示し( $p<0.05$ )、特にrh-LF単独の場合、他の2群と比較し*E. coli*発育抑制効果を強く認めた( $p<0.05$ )(*E. coli*接種前を100%としてrh-LF: 72.6 $\pm$ 9.7%, LYS: 91.0 $\pm$ 13.7%, rh-LF+LYS: 90.2 $\pm$ 6.3%( $n=5$ ))。一方、ME-180細胞存在下では*E. coli*発育抑制効果は、いずれの群においても認められなかった。

【結論】ヒト粘液産生性頸管細胞存在という生理的な条件下でのrh-LFによる*E. coli*発育抑制効果を初めて証明した。生体中存在するLFなどのnatural antibioticsは副作用も少なく長期投与が可能で、今後、頸管における細菌の増殖を抑制する目的で、切迫早産の予防・治療への応用が期待される。